

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

闡提正具

中世の九州といえば、筑前国の博多（福岡市博多区）が大陸文化の摂取拠点として有名ですが、実はその5キロほど北東に位置する多々良川河口付近の多々良地区（福岡市東区）も、外来文化受容の重要拠点でした。現在の多々良橋を渡った川の北岸台地に、かつては、神感山顕孝寺という臨済宗寺院があり、禅寺の本堂や客殿、鐘楼、輪藏、庫裏などが立ち並ぶとともに、一帯には10の塔頭と14の末寺による大伽藍が栄えていました。

この寺を創建したのは、鎌倉時代末期の武将で豊後国の守護大友氏第6代の大友貞宗。貞宗は武士でありながら、仏教への深い理解と厚い帰依を示し、この顕孝寺に中国の高僧を呼び集め、また中国での修行を望む日本僧への手厚い保護や支援をこの寺で行おうとしました。そのため、この寺の開山として招いたのが、臨済宗の開祖明庵栄西の法系を引く黄龍派の闡提正具です。生年は定かではありませんが、1329（嘉暦4）年に入寂したことから、その4年後に没した貞宗と同世代の、鎌倉末期の禅僧といえます。若い頃は「八坂の塔」で知られる京都の法観寺で修行を積み、その後、元に渡って古林清茂（1262～1329年）や

中峰明本（1263～1323年）ら名だたる高僧に参禅したとされます。

大友貞宗に招かれてその本拠、豊後府内（大分市）の万寿寺の住持となり、貞宗が筑前多々良に創建した顕孝寺の開山となったのです。

貞宗との絆は強く、闡提は貞宗に、「具簡」という法諱（法号）と「直庵」という道号（仏弟子の証としての称号）を与えています。

京都の建仁寺塔頭の大中院には、14世紀に描かれた闡提の像があり、質素な法被と袈裟をま

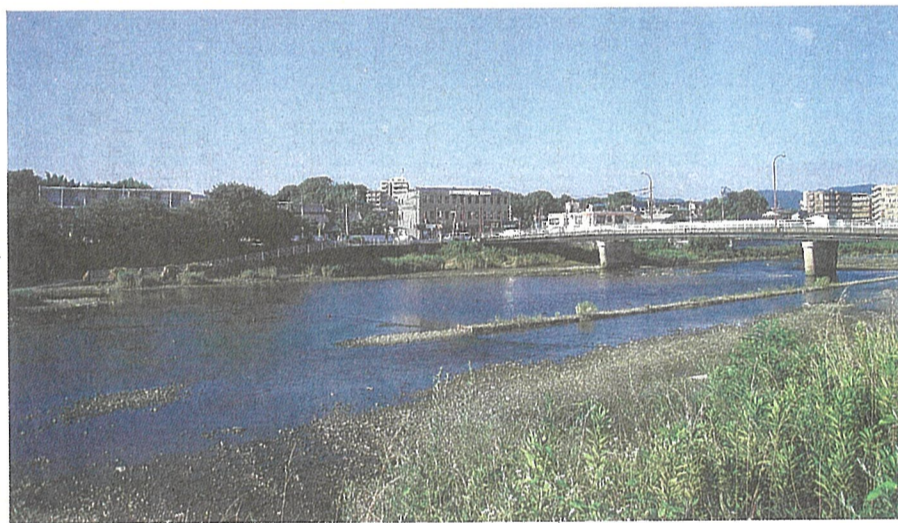
とった隠遁者の姿をしています。闡提の自賛を読むと、万寿寺の住持を務めていた際に「直庵居士」（大友貞宗）が描かせたものと分かります。

闡提が開山となった筑前多々良の顕孝寺は、こうして豊後の守護、大友氏の庇護の下、鎌倉末期から南北朝・室町期にかけての14～16世紀に日中間を往来する禅僧たちの渡航拠点、かつ禅道修行と宗教文化交流のコミニティーとして機能しました。その跡地には「開基 大友貞宗」「開山 闡提正具禅師」と刻んだ石碑が立つのみですが、近年に行われた発掘調査では、弥生から古墳時代の遺物とともに、中世の瓦片や石も見つかっています。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

11月1回掲載

筑前多々良の顕孝寺開山



中世、顕孝寺の大伽藍があった多々良川河口北岸の地（福岡市東区）